

もうひとつ、ジャムセッション、「日本人」の境界、「單一民族神話の起源」(新曜社)で、近代的な意味での「日本」と「日本人」という概念、つまりこの列島における「国民」と「国民国家」という思想の起源と変遷を追った心身気鋭の社会学者による、インド日記である。

著者としてのあしかけ二箇月の滞在とはいえ、ノートパソコンによつて日本へとリアルタイムで転送された「日記」は、あちこちのホームページに転載され評判をよんだ。

このためもあって、本書は本文部分だけで三八〇ページもの分量に達している。ただし、この長さに、ネット文化に蔓延する垂れ流し的の日記文体を連想してはいけない。

これは、近代の全世界で展開された、「国民国家」とナショナリズムの形成史を、自民族特異論ではなく、グローバルなものとして、しかし、あくまでも自分自身の足場とフィールドでもつて深く追いつけてきた著者による同じ方法論を用いて、日本とは異質ではあるが決して特異ではない国インドを理解しようとした、きわめて裏面的な考察の記録なのである。いや、それは精確には「考察」ではなく、はじめて見た事象、はじめて語り合つた現地のひとびとの間の思想のジャムセッションだった。

著者の視点は明白だ。

植民地化されなかつた日本は、新たな国民意識、つまり、階級や地域をこえて同じ日本人であるという意識を植え付けるために、本来は固定した大系ももたぬ神道を利用した。西欧の影響を受けた社会主義者や反エミニストも、大衆による神道新原理主義の受容とともに、やがて反西欧日本主義思想に呑みこまれてゆ

く。「日本人」の境界、「單一民族神話の起源」(新曜社)で、近代的な意味での「日本」と「日本人」という概念、つまりこの列島における「国民」と「国民国家」という思想の起源と

叫ぶにいたつた高群逸枝のように。対するインドは、植民地支配からの脱却の中で、国民意識を醸成していかなければならなかつたために、独立後は、「国民的「伝統」への回帰は絶対命題とされてきたが、その多民族性、多数の宗教の競合体制から、宗教的「伝統」への回帰はひとまずわざにおかれてきた。しかし今、「土着」の伝統の冠をかぶつて、宗教的かつ排外的なヒンドゥー・ナショナリズムが台頭、宗教や人種、狭義のエスニックな民族を越えた汎印度・ナショナリズムは勢いを失いつつある。

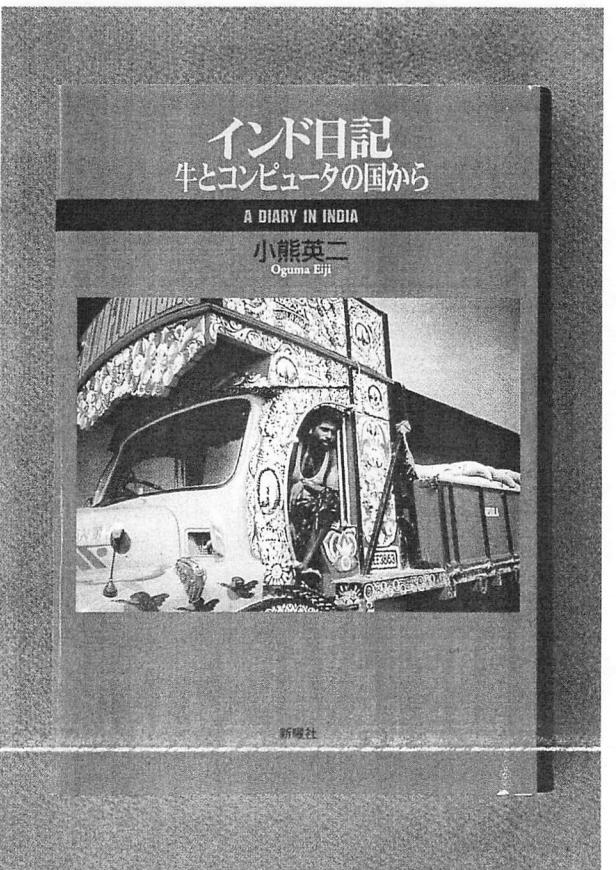
そう、これも決して特異な国の特異な現象ではなく、キリスト教やイスラム教における「原理主義」の蔓延と呼心したものといえるのだ。こうした現象に危機感をいたいた汎インド主義インテリの間では、皮肉にも、「国民国家」意識や「民族の伝統」の虚構をつくべく西欧や日本で展開されているポストモダン思想やカルチャラル・スタディーズが、新右派へと対応するための政治的武器として利用されることとなつた。

右派の言う「伝統」の数々、例えば、女性への差別構造のある部分は、実は植民地時代に形成された、新しく人工的なものだつたのではないか? やつらのとなれる「原理」こそ、植民地主義によつて植え付けられたものだ!

しかし、これら実践的ポストモダニストたちにも、「伝統」や「歴史」の物語の積極的な再構築が危うさを

含んでいるという意識はみてとれない。帝国日本の破産、西欧留学知識人による反西欧社会改造の結果、大虐殺体制を生んだボルボトのカンボジアなどの例をどう見るのか、ジャムセッションのジャムセッションの

とき、ヴァオランティアが運営するスラムの学校で生徒の演奏にあわせて真剣におどり、ときに、インドの現実と未来について、インド人自



小熊英二／新曜社／2700円